

元禄女性のファッションとヘアスタイル（6・6・18）

高尾 一彦（昭18・文乙）

ただ今ご紹介にあずかりました昭和一八年に文乙を出ました高尾一彦と申します。

「元禄女性のファッションとヘアスタイル」というキザな題を出すというのは、大先輩が大勢いらっしやるところでは失礼な事かもしれませぬ。でもじつは七〇歳になって、こんな事を始めましたという報告でございますので、お許しください。七〇年間生きてきた成果がこれだということではなく、今から勉強しますという事でございます。

ある時、大阪のデパートで古書即売会がございまして、その目録でちょっと欲しい本を見つけましたので、それを買いにでかけました。いろいろと見て回ってありましたら、昔の千代紙を見つけました。なんとなく懐かしくなりまして、感動したと申しますか、それを買ってまいりましたので、皆様にお見せいたします。和紙に木版刷りの千代紙でございます。

すこし古びて痛んでおりますけれど、これは矢がすりで、時代物の腰元の着物の柄に出てくるものでございます。次にこれはえらく赤々としていますが、小桜に瑞雲の模様で、めでたいつもりだと思えます。次にこれは青海波ですが、こんな多色刷りでモダンで面白いと存じます。ほかにたて縞やよこ縞だけでもいろいろ種類がございます。さあこれはハサミが描いてありまして、スズメがいるんです。舌切りすずめのお話でございます。

さて千代紙は現在どうなっているのか、気になってまいりました。千代紙という言葉は今日流行らないようで、京都寺町の鳩居堂さんへ行きますと、「京の友禅紙」とか「京友禅のちりめん紙」という名称で売っております。また新京極の井和井さんでは、友禅紙といわないで、「手すき和紙の模様紙」という名で置いてありました。その内容はやはり友禅紙で、同じものでございます。もともと友禅模様の発達した京都では、千代紙というような名前は馴染まないのかもしれないですね。

ただ近鉄百貨店の和紙を扱っている店にいきましたら、「千代紙セット」が見つかりました。千代紙という名称が残っていたので、なぜかホツとしました。ここは京都駅に近く地方からのお客様が多いからでしょうか。

東京はご存知のとおり、伊勢辰さんの千代紙が有名です。ここでは模様を印刷したものを「室町千代紙」と言っております。伊勢辰さんにはほかに木版刷りの上物の千代紙もあって、そちら

は「江戸千代紙」と呼んでいます。

「江戸千代紙」は木版刷りですから、いろいろな色の版木を重ねて刷ります。その時見当を付けますので、ひとつの隅の部分だけわずかに汚れるのです。だから汚れているのが木版多色刷りの特徴です。

それから東京のものと、京都のものと、比べるのは野暮な話でございまして、それぞれのよきがあります。京都はやっぱり友禅染めの地でございまして、華麗で繊細な模様が多おございまして、東京のほうは割合大味と申しますか、素朴と申しますか、それでいてなにか懐かしさを感じさせるものが多おございます。

さて友禅紙あるいは千代紙の歴史はどこまで遡れるかな、江戸文化のうちかな、と問題に致しましたがこれは駄目でした。

東京でパークス・コレクションの展示会がありました。パークスは幕末から明治始めに日本で外交官をしていたイギリス人で、和紙のコレクションがあつたのです。当時の日本人には珍しくもなんともないものでも、パークスは外国人だからさまざまな和紙を集めてくれたのだと思います。

そこには千代紙も少し含まれていましたが、幕末明治の千代紙を見ますと、さきほど皆様にお見せしたものと趣がかなり違ひまして、絵奉書の段階に近い。幕末明治初のもののはやはり渋い

のです。皆様に見ていただいたものは、明治の中頃から大正時代、さらに昭和にかけて発達したもので、素朴でも色どりが何となく明るいし、モダンなものもありました。千代紙の歴史は新しい、せいぜい幕末以後になります。やっぱり、江戸文化として研究するのは無理だなど思いました。

二

しかし千代紙には日本の伝統模様が多く見られます。さきにご覧いただいたものにもありましたが、京都には伝統模様ばかりの千代紙がございます。鳩居堂さんに置いてある「金彩おり紙」などはきわめて華麗なもので、伝統模様の典型的なものです。市松や青海波や、能・歌舞伎など古典芸能の衣装で見慣れた物などがあります。京都というところが、いかに伝統模様を大事にしているかを象徴しています。

東京の伊勢辰の「室町千代紙」や、浅草で見かけた祭礼用の日本手拭いも、箆目、まんじくずし（紗綾形）、束熨斗、松葉くずしなど伝統模様がでてくるので、東京は東京なりにそれを大事にしているなあと思いました。

それではそれぞれで大事にされている伝統模様は、いつごろから民衆生活のなかで生かされ、発展していくのか、話題をそちらに持ってまいります。

さて民衆生活のなかの伝統模様ということになりますと、女性と着物がまず関連してまいりま

す。ただしここでは高貴な女性や高価な着物は取り上げません。その方面は美術史やきもの意匠史の領域があり、美術品や美術書など資料が豊富です。史料がほとんど残っていない普通の女性や普段の着物を頭において、伝統模様の展開を考えます。

そもそも日本歴史の中で出てくる女性はきわめて限られたものです。たとえば今日NHKのドラマに出てくる日野富子など、確かに日本史上の女性ですね。でも歴史上の女性の名前はきわめて少ない。ある人が教科書で数えたらたった一三人で、男性にくらべて非常に少ない数です。とくに庶民の女性は、名前はおろかその姿さえ歴史の舞台に登場することはありません。

でも歴史を半分作っているのは女性ですから、それを発掘できないはずはないし、概説に描けないはずもないのです。ただその作業がしやすいか、しにくいかが、時代や領域で違ってきます。せめて発掘しやすい時代からでも、日本女性史構築のため始めるべきだと、この年齢になって思うようになりました。

それがしやすい時代のひとつが元禄時代でしょう。元禄時代は、日本歴史の上で民衆女性が大挙して出てくる時代です。

元禄時代の民衆女性を描く史料はいろいろありますが、伝統模様と結び付くものは衣装であり、それを知らせるのは浮世絵のような絵画資料です。ただし高価な肉筆浮世絵より墨一色の版画とくに絵本が大事です。そのなかでも象徴のようなものが、菱川師宣の絵本「和国百女」でござい

ます。

菱川師宣の絵本「和国百女」といっても、女が百人出てくるわけではありませんが、ともかく女性が大量に登場いたします。また、浮世絵のことで、すこしエッチな本かなと思われるかもしれませんが、それがなかなかそうではありません。この手の絵本には画面の上段に頭書がございまして、その頭書の言葉書きもなかなかしつかり書いてある。しつかり書いてあるから、女性教育、女性教養にも役立ちそうです。

ただし教育教養といっても、あまり儒学朱子学の女性観とは関係ありません。いわばそういう教養のない浮世絵師の文章でしょうから。でもそれなりにしつかり書いてあって、それなりに面白いのです。

もちろん教育書でなく娯楽本ですから、女性風俗を視覚的に展開しており、女性には教養書というよりファッションブックとして歓迎されたかも知れません。なにしろ沢山の女性がいろいろな意匠のきものを着て、またいろいろな日本髪を結うて現れるのですから。

なお菱川師宣の「和国百女」という絵本は元禄八年江戸での刊で今では稀購本ですが、日本風俗図絵1（柏書房）に復刻されています。

三

本題の元禄のファッションからお話を進めます。ファッションなんて申しますが、要するに着

物の柄のごさいます。着物自身にそう変わった仕立てなどできないわけですから、変化はきものの模様ということになります。

ただしその高級なものは「女用訓蒙図彙」とか友禅模様の雛形本に見られるが、かえって普通の着物の柄が描かれていません。その点「和国百女」は、さまざまな民衆女性が出てきますので、一般レベルでの着物の柄を描き出さざるを得ません。「和国百女」のような絵本にでてくる模様の整理は、民衆女性に好まれた生活文化としての伝統模様の原点を示すだろうと思われま

それで「和国百女」の模様を調べましたところ、つぎのようなこととございました。ともかく植物関係の図案が圧倒的に多いのです。とくに多いのが、

桜 二九例、菊 一八例

でした。桜と菊は、当時の日本人好みの代表的な花だということが判ります。ついで、

鉄線 四 海松 四 撫子 三 梅 三 かたばみ 二 蕪 紅葉 桐

若松 棕櫚 桔梗 蕨 各一

でした。また植物を図案化したもの

梅鉢 七 露芝 六 木瓜 二 唐花 二

でした。

さらに幾何学的あるいは自然的な模様があります。

七宝 一二 割菱 一二 雪形 六 霞 五 亀甲 三 紐 二 渦卷 二
立波 二 日足 二 雁がね 菱つなぎ 雷文 三星 扇 片輪車 束の
し 白餅 網目 各一
よこ縞 一〇 たて縞 一
などです。

これらは元禄当時ごく普通の模様であり、一般の民衆女性に理解でき、利用でき、好まれし
たものに違いありません。菱川師宣はそういうことを念頭において、描いたに違いないでしょう。
もともと菱川師宣は江戸の浮世絵師ですから、少しは江戸の好みに片寄っているかも知れませ
ん。上方の好みは少し時代が遅れますが、西川祐信の絵本「百人女郎品定」で判明するでし
ょうが、これは次回にゆずります。

それはともかく、ここに出てこない模様があります。矢がすり、麻の葉、青海波、網代、観世
水など、この後それらを含めた広い領域の伝統模様が形成され、生活文化の中に取り入れられ発
展するものと思われます。

ついで「和国百女」のヘアスタイルに移ります。

圧倒的に多いのは島田まげです。その島田も普通の島田のほか、ほそみのもの、ひつつめの大
島田、丸島田、しめつけ島田、先割り島田などのバリエーションが出てきますので、さすが元禄



菱川師宣『和国百女』「ゆうひつ」秘書 [女性着物模様] 桜 唐花 桐

日本風俗圖繪二一八



日本風俗圖繪一と九

菱川師宣『和国百女』「おものし」裁縫師

梅鉢 菊 霞

○たゞこのゆきや
 ちりめんやあしひき
 じんせるとは目か
 めくきり事まへ
 けりぐらうたにぬか
 さしし束ねるはた
 ていねふあとのも
 むりりびきそのみ
 とこのはねる膝
 への糸やまえん
 ざらとせのほひ
 とねたる見んどん
 かりのあや城
 ざりいと成めてか
 いふふささやその
 かそとぞりむえ
 あかると膝かひら



日本凡俗圖繪之三十四

菱川師宣『和国百女』「片輪」髻

菊

○これんごうち
 すぎきてしれは
 まゝむすめを
 ちかむ張やう
 せんねやうら
 こまひあひら
 能きあひら
 ろうりせてその
 のげのれさか
 浮舟のうら
 めいあつれさ
 のあわてびり
 あげりてあ
 わりさぬとわ
 ちねむすめ
 のねんざを
 うかあひら



日本凡俗図繪一ノ五四

菱川師宣『和国百女』「丸島田・先割り島田」髻 梅鉢 桔梗 海松

時代だと感心いたします。

ほかに玉結び、勝山、兵庫、片輪、笄わけなどが出てまいります。

片輪などは、これまでの日本結髪史を見ましても余り出てこないのですが、「和国百女」ではあちこちに描いてあります。片輪は元禄時代に大変大事なヘアスタイルであったと思います。いやいや江戸幕府の法令にまで出てくるのです。法令では片輪まげを禁止しているのですが、すこし時期が下がり宝永六年になります。何故禁止したのかというと、御所風に近いからでしょう。でも禁止してもそう簡単に女性が従ったとは思えません。女性はこのあたりで美意識なり見識なり、突っ張りなりを示したことでしょうから。

今日島原の観光用の大夫が結う立兵庫や、三つ鬘、祇園の舞妓の結う割しのぶ、奴島田、お福、先笄や、民間で娘たちに好まれる結綿など、素敵だなあと思うヘアスタイルは、まだ「和国百女」に出てきません。元禄当時にはなかったからで、このあとに発展していくのです。

さてそのように伝統模様でも日本髪でも、つまりファッションでもヘアスタイルでも生活文化として発展をとげるのは、その主体の民衆女性が日本史の半分の主役として、歴史の舞台に登場してきたからです。

四

もう一度「和国百女」の頭書に戻りましょう。この頭書から得られる教訓教養で一般民衆の女

性像を描き直してみます。

元禄当時の民衆女性に、まず二つの素敵な職業がありました。それはセクレタリーと、ドレスメーカーです。頭書の言葉に従えば、「ゆうひつ」と「おものし」です。

「ゆうひつ」というのは字を書く、書記あるいは秘書のようなもので、枯筆、右筆と書きます。江戸や京都のような都市生活を送る身分ある女性たち、たとえば武家の奥方、大きい商家のお内儀を中心に、女性ばかりの社交が始まった。社交社会ができて、そこでメモや手紙の取り交わしや、ちょっとした記録の必要性がおこり、彼女たちに秘書がいるようになりました。そこで「ゆうひつ」という職業が成立します。ただし住み込みの奉公人でございます。

「和国百女」の頭書は、できるだけ字を書く稽古をしない、上手になったら「ゆうひつ」に雇ってもらえる。また「ゆうひつ」が終わって家に戻っても、手習いつまり書道の先生ができるよ、というのであります。

つぎに「おものし」ですが、これはきものを仕立てる裁縫師のことです。

元禄時代はまだ今日のような衣料品店や、ドレスメーカーはありません。着物はたいてい反物の形で買って、家できものに仕立てるのです。だから先ほどのような「ゆうひつ」を必要とする家なら、「おものし」を雇って家ちゅうの家族の着物をつくらせます。

裁縫師といっても得意な分野もありましょうし、家々で好みもあるでしょうから、「おものし」

の仕立てに飽きぐるまでを限度に、それら裁縫師を住み込みの奉公人として雇い入れたらしいです。

「和国百女」の頭書は、針をもちものを縫い習うべきことをすすめており、奉公が終わって里に帰っても、和裁の先生ができることをのべている。

これで元禄時代の民衆女性にとつて、セクレタリーやドレスメーカーがいかに素敵な職業であったかがよくわかります。いわば民衆のトップクラスの女性の職業になります。

そのつぎの職業として芸能による奉公があります。「和国百女」は、琴、三味線、踊り、唄、小舞、能仕舞などの芸能の稽古をすすめています。それらが上手になったら、上流社会から高給で雇ってもらえる、ということです。これも女性たちの社交社会の成立の需要でありましょう。これは中間の女性の職業ということになります。

最後は広範な衣料生産に従事する民衆女性で、「和国百女」は彼女たちの職業をたたえ、とくに京・堺では紗綾・縮緬・綾・錦・緞子など何でも自由に織り出せるとある。まあこれら絹生産は都市の民衆女性の職です。農村では木綿生産になります。「和国百女」はとくに河内の木綿、越前布、明石ちぢみ、奈良ざらしなどを、「女の所作」として、それら生産に従事する女たちをたたえています。

さて「和国百女」はいろいろな女性に係わる話題を書いていますので、その中から一般的な働

く民衆女性のイメージを拾い出せば、以上のような秘書など知的な職業をトップにして、さらには芸能関係の職があり、その下に衣料生産に係わる広い裾野が続いていることがわかります。何よりも大事なことはそれらが自立できる女性の職だということです。

これで広範な女性が元禄時代には歴史の舞台に登場し、自立して生活文化を築きつつあることがある程度理解できます。

かくて元禄の菱川師宣の「和国百女」のファッションやヘアスタイルこそ民衆女性の生活文化を象徴するものであり、都市や農村にわたって意味をもったものであったと考えます。すると「和国百女」にかぎらず、元禄前後に刊行された絵本はいずれもその観点からの再検討が必要になるのではないのでしょうか、というのがこのお話の結論でございます。ありがとうございます。

(神戸大学名誉教授)